

教員の厳しい指導叱責を要因に昨年3月、男子中学生が自殺した池田町で、学校教育の課題共有や行政、学校、社会の連携を強化する「教育環境向上化プラン」が進んでいる。近く開かれる教育大綱改定に向けた検討委員会を前に、今春新設されたポストでプラン推進を担当する内藤則幸教育企画官(62)＝越前市＝に取り組みや会議への思いを聞いた。(中坪佑香)

中学生自殺受け今春新設 池田町・内藤教育企画官



「行政と学校を円滑につなぎたい」と話す内藤教育企画官＝21日、池田町能楽の里文化交流会館

内藤 則幸(ないとう・のりゆき) 1978年に教員となり、越前市内の小中学校や市教委に勤務。南越中校長などを歴任し、2016年3月に定年退職した。

楽しいと思う学校に

―就任4カ月、どのような業務を。

―就任4カ月、どのようの管理職らと話をしている。池田町教委の職員で教員経験があるのは

私だけ。学校は子どもを指導し、行政は教育の施策を推進するそれぞれの立場がある。これまでの

管理職が「あの子はきょうどうだった？」と教職員にひと言尋ねるだけで違

り。池田小中はそうした姿勢があることに安心しているし、支えていかな

―理想と考える学校は。子どもが楽しいと思う学校。自己存在感を味わえ、自己決定ができ、共

経験を生かして互いの背景を説明し、うまくつなごう。池田小中の印象は。一人一人を大切にしたい。大綱改定、子育て教育向上委員会まわりの「教育大綱改定の検討委員事務局員として参加する。委員の意見を聞き、大切なことを自分なりに見つけていきたい。テーブル会議では出てきた意見を基に学校と相談し、表現できるものは現場に反映できれば。小規模な地域に学校があるメリット、デメリットを会議で探り、学校、家庭、社会の三つの教育力が発揮さ

る環境にしたい。―子どもが楽しいと思う学校。自己存在感を味わえ、自己決定ができ、共感的理解ができるのが大切。例えば、絵の上手な子どもの作品だけでなく、全員分を貼ることや、修学旅行の行き先を話し合

って決めること。絵1枚から自分の存在を感じられるし、決めて行動する経験を重ねて、将来もっと大きく自分の人生を決定していくから。基本的に教員として知っていても当然のことだが、これがきちんとできていれば学校が楽しいと思う。